鑑からの引用だけでそういう説明ができるということである．

植物は新Englerの逆順に配列され，解説は1,771項目あるとのことで，それぞれに写真を伴っているが，同じ種類でも花の色や生態が異なっていて複数載せられているものもあり，写真の数は2,700点餘におよぶ．植物の記述は著者の現場での観察記録に基づいたもので，花が最も美しく見える時期を主体にしており，生育期全般を対象とした一般の図鑑のそれとは別な，独自の行き方である．通常の図鑑では，写真家の作品にいわゆる専門家が同定を行って解説文をつけるのが常識だが，本書ではそのすべてを写真家の著者自身が行っている．

ヒマラヤ植物研究会のメンバーである著者は，この図鑑の製作のため，ときどきインドに出入りしてビザを更新しながら，ネパールに8年間住み続けたという．おそるべき勉強と執念の産物と言うべきだろう．多くの人の手に渡って，ヒマラヤのみならずアジアの植物の理解に貢献することが期待される．巻頭4頁に，ヒマラヤの植物研究史と題する大場秀章氏の一文がある．　　（金井弘夫）

□白山高山植物研究会編：**白山麓における高山植物の馴化試験**　161 pp.　2005．A4版．石川県環境安全部自然保護課，白山市．ISBN: no number.

石川県白峰村（現在は合併して白山市）は1998年以来，清水建美氏の指導の下に，白山の高山植物の栽培・馴化の試験研究を進めてきた．これは8年間にわたる成果の報告である．

白山は2702 mという「高山」にしては低い山にもかかわらず，特異な植物を多く産することで知られている．最近の地球温暖化の傾向から見て，たかだか300 mの幅しかないこの山の高山帯は，あと100年足らずでほとんど失われてしまう心配がある．このために，現に生育している植物種をなんとか保存する方策を探るというのが，この事業の目的であった．

現場を乱さないため，材料はすべて種子を採取し，山麓に圃場と温室を設け，発芽から苗の育成，開花に至る迄が観察記録されている．高山植物の栽培というと，花の美しいものに偏りがちだが，イネ科やスゲ科も扱われている． 発芽には人為条件を避けて，極力自然状態に置く努力がなされており，さらに圃場から露地栽培へと移行させることが試みられている．こうして生育保存に成功した中から，174種類がカラー写真で示され，発芽や生育のよしあしや病虫害の状況などが簡単に記されている．とくに，発芽直後の実生の写真は，あまり例のないものだろう．草本類の多くは，開花にまで至っている．白山のブナ帯以高に生育する545種類のうち，テストしたもの418種類．そのうち発芽したもの86 %，開花に至ったもの38 %で，継代的に開花結実する種類も増加しているとのことである．従来型の「自然保護」とは異なり，対象地域の植物群全体を保存するという新しい試みであり，今後の展開が注目される．

本書については，奥付にある白山市自然保護課では情報がなく，白山市白峰支所（tel 0761-98-2011）に問い合わせたところ，一般頒布の計画はなく，地域図書館での閲覧は可能だろうとのことである．　　（金井弘夫）